

アドレリアンの性格傾向 —Y G性格検査とT E Gによる調査—

中島弘徳*

* 近畿大学医学部第4内科(当時)

要旨

キーワード:

<目的>

日本に現代アドラー心理学が紹介されてから9年目を向かえた。日本アドラー心理学会の会員数も1990年7月の時点で450名を越えたとの報告もある。日本のアドラー心理学の拠点の一つであるアドラーギルドに集まる人々をみても、医療従事者や教師のみならず企業関係、家庭の主婦など多種多様な人々がアドラー心理学を学び、それぞれの得意とする分野でアドラー心理学を広めていく責任を果たしている。

こういった中、今アドラー心理学がどのような人々にささえられているのかを調べ、今後の展開に参考になる資料を得ることを目的として、1990年8月の第7回日本アドラー心理学会の会場においてY G性格検査(以下Y G)と東大式エゴグラム(以下T E G)を実施した。以下、その結果と若干の考察を報告する。

<方法>

被験者: 日本アドラー心理学会第7回総会最終日の各分科会参加者のうち37名
(男性19名、女性18名)

手続: Y GとT E G

<結果>

(Y Gの結果)

Y Gプロフィールの類型は、男性がA'、C、C'、AC、D、D"、E'、AEの8型が得られ、女性はA'、A"、C、AC、D、D"の6型が得られた(図1)。全体でのプロフィール類型は、男女ともD'型であった(図2)。

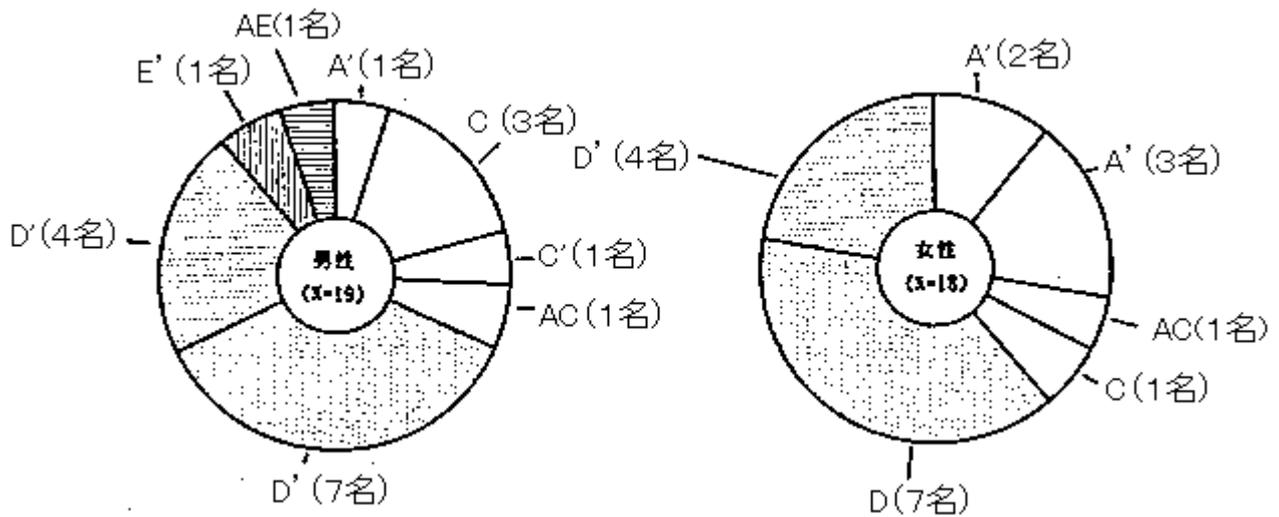


図1 YGプロフィールの類型(1)

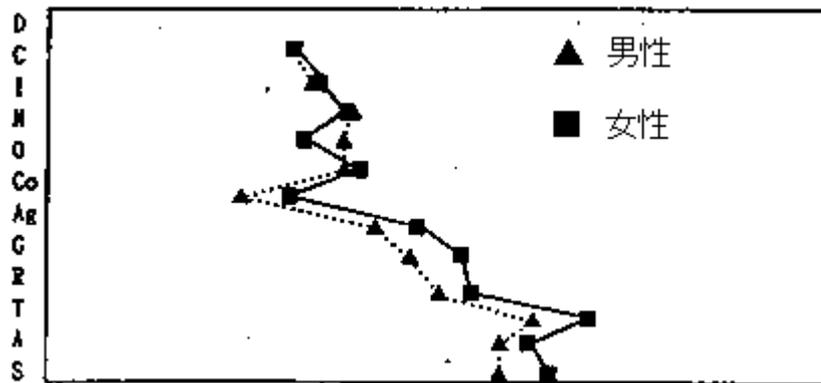


図2 YGプロフィールの類型(2)

個人別で因子尺度をみると、男性では仰うつ性、気分の変化が小さく、強調性が高かった、女性では、神経質が低く、強調性が高く、思考的に外向の傾向を示した(表1、表2)。YGプロフィールの類型をAタイプ(A' + A''), Cタイプ(C + C' + AC)、Dタイプ(D + D')、Eタイプ(E' + AE)に分け、各々のタイプの平均値とD~Sの尺度をt検定で比較検討した。

その結果、男性ではD、I、N、O尺度で、DタイプがCタイプ、Eタイプより有意に低く(D・N尺度、 $p < 0.01$ 、I・O尺度、 $p < 0.05$ 、 $p < 0.01$ 、C o尺度でEタイプがCタイプ、Dタイプより有意に高く($p < 0.01$ 、さらにA g尺度では、DタイプがCタイプより有意に高く($p < 0.05$)、G、R、T、A、S尺度では、DタイプがCタイプ、Eタイプより有意に高かった($p < 0.01$ 、ただしR尺度のみ $p < 0.01$ 、 $p < 0.05$)。女性では、D、C、N、O、C o尺度で、AタイプがDタイプより有意に高く($p < 0.05$ 、C尺度のみ $p < 0.01$ 、I尺度で、Cタイプより有意に高かった($p < 0.01$ 。A g、G、A、S尺度では、DタイプがCタイプより有意に高く($p < 0.05$ 、 $p < 0.05$ 、 $p < 0.05$ 、 $p < 0.01$)、G、A、S尺度では、さらにAタイプよりも有意に高かった($p < 0.05$ 、 $p < 0.01$ 、 $p < 0.01$ 、表3、表4)。

各因子尺度の得点

No	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S	判定
1	6	9	1	7	9	2	12	12	10	7	11	18	A
2	1	3	6	10	2	2	3	5	3	10	7	8	C
3	4	2	3	3	4	3	5	10	6	9	11	12	C
4	14	4	8	10	8	0	2	0	0	4	4	2	C
5	14	6	14	14	6	4	6	1	3	0	0	6	C
6	8	7	7	10	9	2	10	4	9	5	7	14	AC
7	4	6	1	2	2	0	15	18	14	10	15	18	D
8	2	2	0	4	1	0	8	18	10	13	14	18	D
9	2	4	4	0	6	2	6	14	10	18	12	18	D
10	1	0	3	1	1	0	7	12	10	15	13	18	D
11	4	8	4	4	0	2	12	16	18	18	15	18	D
12	0	3	0	2	0	0	17	19	15	18	18	20	D
13	2	8	5	6	5	6	11	20	16	14	15	14	D
14	4	6	6	5	4	3	9	10	18	15	11	12	D
15	0	1	4	1	2	0	5	8	10	17	15	13	D
16	1	10	6	3	6	6	11	13	20	17	16	19	D
17	0	4	2	4	2	0	8	12	10	12	8	18	D
18	14	7	19	14	9	10	5	5	5	7	6	3	E
19	8	6	8	16	10	11	11	2	7	8	6	4	AE

表1 YG性格検査結果(1)

各因子尺度の得点

No	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S	判定
1	11	10	9	12	13	3	13	5	8	9	6	9	A
2	12	13	12	13	9	5	12	3	15	15	6	8	A
3	10	12	15	5	10	7	4	11	2	12	5	6	A
4	2	9	6	8	6	5	10	17	12	11	9	20	A
5	14	10	11	2	14	5	8	2	14	13	9	10	A
6	11	5	2	5	3	2	8	7	12	14	10	12	AC
7	4	2	6	2	0	4	8	7	8	16	9	12	C
8	0	8	4	2	8	2	13	20	15	14	16	18	D
9	0	3	0	0	0	0	8	9	7	17	17	20	D
10	3	3	2	1	3	0	5	13	8	18	19	18	D
11	5	9	3	6	6	4	14	20	15	10	15	17	D
12	5	4	1	2	2	1	8	14	8	16	14	16	D
13	2	3	0	7	3	2	10	14	9	8	17	18	D
14	14	8	5	3	13	1	12	15	15	12	13	15	D
15	5	0	4	6	6	2	10	20	12	6	20	20	D
16	4	9	3	3	3	3	9	11	9	13	12	16	D
17	0	2	0	0	6	2	9	12	8	17	16	19	D
18	6	4	3	5	4	1	11	14	9	9	8	13	D

表2 YG性格検査結果(2)

\D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S	
A	6	9	1	7	9	2	12	12	10	7	11	18
C	8	4	8	9	6	2	5	4	4	6	6	8
D	2	5	3	3	3	2	10	15	14	15	14	17
E	11	7	13	15	10	11	8	4	6	8	6	4

表3 YGのタイプにおける各尺度の平均値 (男性)

\D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S	
A	10	11	11	8	10	5	9	8	10	12	7	11
C	8	4	4	4	2	3	8	7	10	15	10	12
D	4	5	2	3	5	2	10	15	11	13	15	17

表4 YGのタイプにおける各尺度の平均値 (女性)

(TEGの結果)

TEGエゴグラム・プロフィールは、男性全体でNP優位型が、女性全体でA優位型が得られた(図3)。

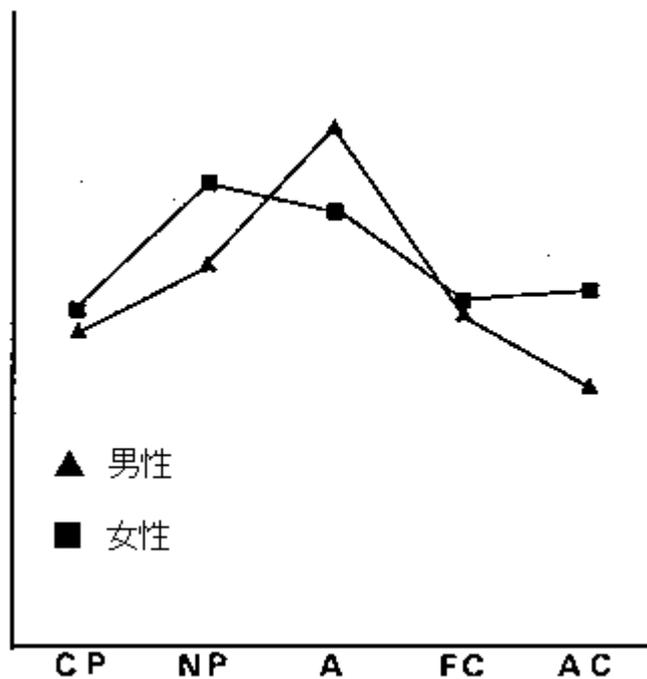


図3 TEGエゴグラム・プロフィール

YGのタイプ別にみたエゴグラム・プロフィールを、図4、図5に示す。各タイプにおけるTEGの5尺度の平均値をt検定で比較検討した結果、男性では、AでCタイプがEタイプより有意に高く ($p < 0.05$)、FCでDタイプがCタイプ、Eタイプより有意に高かった ($p < 0.05$)。ACでDタイプがCタイプとEタイプより有意に低かった ($p < 0.05$, $p < 0.01$)。女性では、NPでDタイプがCタイプより有意に高く ($p < 0.05$)、AでDタイプがAタイプより有意に高く ($p < 0.05$)、ACではCタイプよりも有意に低かった ($p < 0.01$ 、表5)。

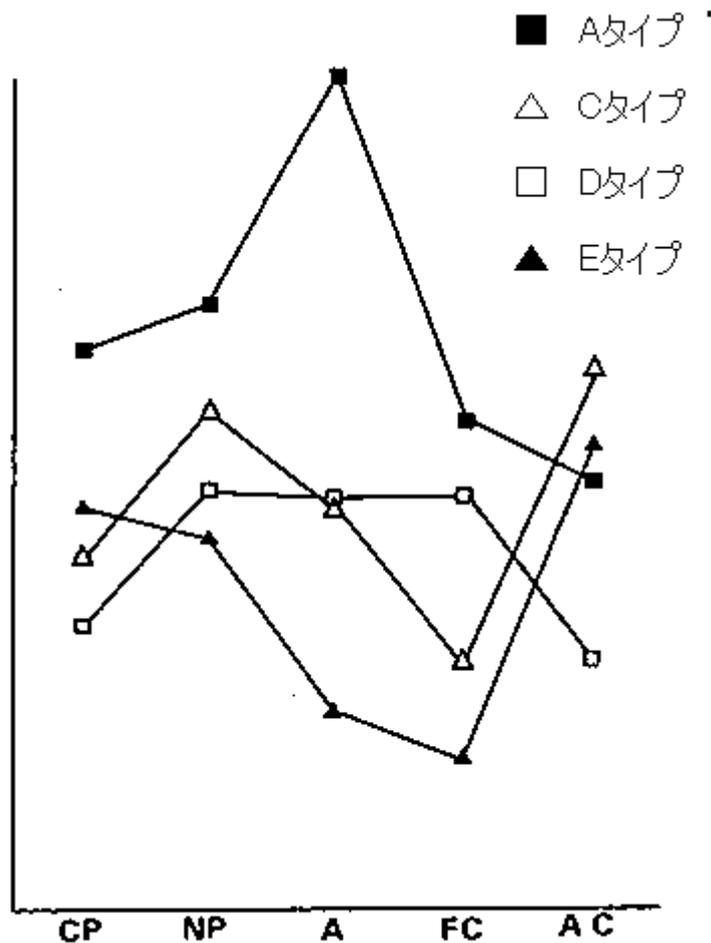


図4 YGのタイプ別にみたエゴグラム・プロフィール (男子)

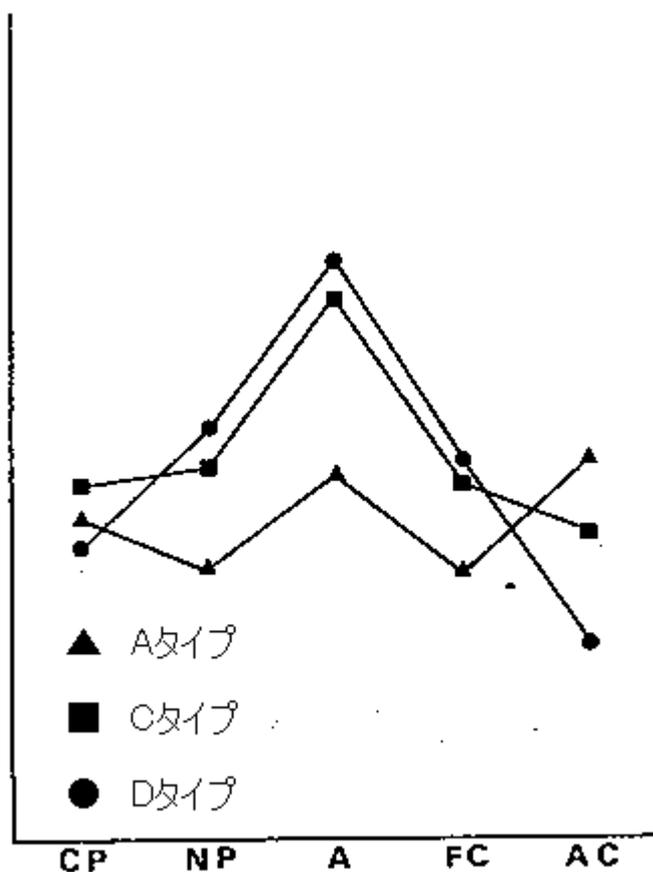


図5 YGのタイプ別にみたエゴグラム・プロフィール (女子)

	男性						女性					
	CP	NP	A	FC	AC	n	CP	NP	A	FC	AC	n
A	11	17	20	11	9	1	6	12	10	4	16	5
C	6	14	11	5	12	5	4	9	9	6	9	2
D	5	12	12	9	3	11	4	13	14	9	2	11
E	8	11	6	10	10	2						

表5 YGの各タイプにおけるTEGプロフィール平均値

<考察>

今回は、分科会の始めに有志を募って回答していただいた。そのため被験者の数が少なかったこと、積極的に協力していただいた方の結果であることなどから、得られた結果には、妥当性・信頼性にかなり限度があると思われる。それを前提に、得られた結果について若干の考察をしてみたい。

YGの結果は男女とも情緒安定性、社会適応性が高く、向性が安定積極型であるD類が約6割近くみられた。全体のプロフィールをみてもD類に属するD' という結果が得られた。因子尺度別では、特に協調的因子が高かった。TEGの結果は、男性がNP優位型、女性がA優位型であり、これは共に自他肯定タイプであった。

これは、高い自己評価があり、基本的に相手を信じ、感情的にならず、集団への所属感があり、真剣に努力し不必要に悩まない、といった傾向を示していると考えられる。これらは、アドラー心理学の考える健康な人間であり、よい人間関係を築き勇気づけるための重要な要素である。こ

ういった要素を単に理解しただけでなく実践できるようになることが重要である。その意味で、アドラー心理学が身体化し定着化しつつある人が多いことが示唆された。

また、TEGにおいて男性がNP優位型で女性がA優位型という結果が得られたことについては、鎌田（1990）のいうアドラー心理学の日本の特徴を参考にして考察すると、日本では男性のほうには、いまだに女性に比べさまざまな状況で責任をとることがより求められていると思われる。また、アメリカほどではないものの、自己主張やリーダーシップを発揮できることが期待されている。これに比べて、女性には、相手を受け入れ同情する、つまり面倒みがよく思いやりがあるような人であることが期待されている。TEGで考えると、男性にはCP的な要素が要求され、女性にはNP的な要素が要求されていると考えられる。こういう状況下でアドラー心理学の影響が、男性にはアメリカ的にお互いを勇気づけ、自分の考えをうまく相手に伝え、他者と協力関係を築けることを学ぶ面にはたらき、女性には責任の取り方を学ぶこと、つまり課題の分離を学ぶ点にはたらいたと思われる。その結果、男性は社会的協調性に富んだNP優位型を示し、女性は理性的・合理的なA優位型を示したと思われる。

さらに日本のアドラー心理学が共同体感覚をベースとして横の関係を形成していくことを重視した、movementとしてのアドラー心理学（鎌田、1990、pp7）であることを考えると、このmovementが広まってきていることを示唆しているとも考えられる。

YGのタイプ別のYG尺度とTEGのエゴグラム・プロフィールにおいて有意差がみられたものは、YG、TEGが意味することから考えて矛盾する結果は得られなかった。また、TEGのエゴグラム・プロフィールとの関係は、男性の場合CタイプがN型、Dタイプが台形、EタイプがAC優位型を示した。女性はAタイプが平坦型を示した。これらについては、末松らの研究を支持するものである（末松ら、1989）。これは、今回の調査において前述したように限界があるものの、ある程度の妥当性が得られたことを示唆している。

アドラー心理学からみれば、ひとりひとりを分割できない全体として理解することが重要で、心理検査の結果をマスの情報として分析し解釈することはあまり意味がないと考えられる。しかし、面接などの経過を追うときに定量的な価値としての有用性は考えられる。そこで今後は、縦断的調査や他派との比較などができれば興味深いのではないかと考えている。

<文献>

- 1) 鎌田穰（1988）：アドレリアン・カウンセリングの実際、アドレリアン、Vol.2,No2,pp93 - 102
- 2) 野田俊作（1990）：アドラー心理学が身体化したカウンセラーを、アドレリアン、Vol.4,No.1,pp1
- 3) 鎌田穰（1990）：世界のアドラー心理学とその日本の特徴、アドレリアン、Vol.4,No.1,pp3-8
- 4) 末松弘行他（1989）：エゴグラム・パターン、金子書房
- 5) 辻岡美延：YG性格検査実施手引、日本・心理テスト研究所
- 6) アドラー心理学基礎講座資料

<謝辞>

学会の場で快く心理検査に取り組んでくださった方々にお礼を申し上げます。

更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載